

Title	花の公案(二) : 世阿弥の稽古思想
Sub Title	The catechism for the learner of the Noh Drama
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1963
Jtitle	哲學 No.45 (1963. 12) ,p.111- 133
JaLC DOI	
Abstract	The catechism of the Noh Drama contains many questions and answers of training which are the lessons for the learner. In the catechism the learners find their lessons to learn, the problems to solve, the methods to use and the goal to attain. They learn their lessons by their mind-body training. The present thesis takes up eleven lessons from the seventh chapter of 'Kwadensho' and examines the logical and psychological aspects of the catechism. In our conclusion we see Zeami's ethical theory of training in which he says, "train hard, but do not be selfish".
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000045-0111">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000045-0111</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 花 の 公 案 (二)

——世 阿 弥 の 稽 古 思 想——

中 山 一 義

## 目 次

### は し が き

1. 花と珍しきと面白きと、これ三つは同じ心なり。
2. 花の公案を極めたらん為手をば、花を得たとや申すべき。
3. 花を知る事、この道の奥儀を究むるなるべし。

### 花 の 公 案 の 心 理 と 論 理

1. 時の花の外に、珍しき花のあるべき。 (『花伝書』第七別紙口伝)
2. 花とて別にはなきものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり。(同上)
3. 鬼ばかりせんずる為手は、巖ばかりにて、花はあるべからず。(同上)
4. 年寄の若振舞、珍しき理なり。老木に花の咲かんが如し。(同上)
5. 常よりもなほ面白きが、見聞く人のため、珍しき心にあらずや。(同上)
6. 秘すれば花なり。秘せずは花なるべからず。(同上)
7. 能に十体を心得べき事。(同上)
8. 年々去来の花を忘るべからず。(同上)
9. 舞・働き・物まね、あらゆる事に、住せぬ理あり。用心を持つべき事。(同上)
10. 因果の花を知る事、極めなるべし。一切、みな因果なり。(同上)
11. 因果とて、よし・あしき時のあるも、公案を尽して見るに、ただ、珍しきと珍しからぬの二つなり。(同上)

### む す び

1. 稽古の倫理
2. 稽古は強かれ、静識はなかれ

は し が き

1. 花の比喻 四季折節時を得て咲く花を、芸能の面白さに喩へることを思ひつuitしたのは誰か。世阿弥か、父の観阿弥か、田楽の一忠・日吉の犬王のごとき先輩の名人たちか、わたしはそれを知らない。しかし、「花の比喻」とも名付くべきこの思想を基にして、世阿弥はすぐれた芸能理論を組立てて、数多くの秘伝書を書き遺してゐる。「花の比喻」は、世阿弥が生涯をかけて組立てた理論にとつて、根本原理のやうな意味をもつてゐる。世阿弥自身そのことをはつきり、『花伝書』第七別紙口伝の劈頭に、下の如く記してゐる。

この口伝に、花を知る事、先づ、<sup>けんりよう</sup>仮令、花の咲くを見て、<sup>よろづ</sup>万に花と喩へ始めし<sup>ことわり</sup>理を弁ふべし。

そもそも、花と云ふに、万木千草において、四季折節に咲く物なれば、その時を得て珍しき故に翫ぶなり。申樂も、人の心に珍しきと知る所、即ち面白き心なり。花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり。いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く<sup>ころ</sup>比あれば、珍しきなり。能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。住せずして、余の風体に移れば、珍しきなり。

この短い文章の中には、その後に展開する芸能理論の根源が秘められてゐる。

まづ第一に、能と花との類比は、「花の咲くを見て、万に、花と喩へ始めし理、云々」といふ文言から見て、花の生態の深い観察から生れてきてゐることがわかる。世阿弥の芸能理論の基礎原理である「花の比喻」が、このやうに現実の花の現象形態のまともな観察を基にした類推であることは、「花の比喻」そのものの信頼度を高めるとともに、これを原理として展開された芸能理論に確實性を与へてゐるらしく思はれる。

第二は、この比喻の心理的な側面であるが、「四季折節に時を得て咲く」

ところに、人々に愛翫される所以を見出して、その心理を「珍しき」として捉へ、四季の花の面白さは、この珍しさに由来すると見て、「花と、面白きと、珍しきと、これ三つは、同じ心なり。」といふ結論に到達してゐる。しかし、「同じ」といつても、珍しさが根源で、面白さはそこから生れ、そこに花がある。しかし、それは発生の順序ではなく、ただ、心理の在り方である。そこで次の関心は、「珍しさをいかに演出するか」といふ問題に集つてくる。この度の論稿のねらひの一つはそれを究明するにある。

第三は、「珍しさの論理」の問題である。「いづれの花か散らで残るべき、」これは花の生態観察による「花の実相」のいつわらざる言表である。「散る故によりて、咲く<sup>さ</sup>比あれば、珍しきなり、」これこそ、まさに、「珍しさの論理」である。「花の比喩」は、ここで一躍して、「能も住する所なきを、先づ、花と知るべし、」と推論する。一所不住は仏教で説く無常である。能の花、その珍しさ。面白さの由つて来るところは、論理の上では、芸花の無常性にあるといふのである。「花の比喩」の根底には、このやうに仏教的実相観の論理が存することを知るのである。花と能との間には、実相観の上から、無常といふ点において、類比の論理が成立するのである。能の花の論理的構造について、「住せぬ」「因果」・「陰陽の和<sup>わ</sup>」・「相應」といふことなど見るべきものもあるが、本稿では、その一部のみを採り上げて見る。

2. 花の公案 世阿弥が『花伝書』の中で、「花の公案」と呼んであるところのものは、(1)「花の比喩」を基にして、珍しい芸花を咲かせるために、古来能役者たちが稽古や演能の際に苦勞して見つけ出した血や汗の結晶ともいふべき「花を咲かせる手立のいろいろ」である。また、(2)現に稽古をしてゐる者にとつては、稽古の課題であり、指針であり、準則であり、また、目標でもある。さらに、(3)この「花の公案」を究めた役者は、「真の花」を持つた為手として、老年になつて、「たとへ、能は下るとも、

花は残るべし、」と云はれ、「花だに残らば、面白き所は、一期あるべし、」(『花伝書』第二問答条々)と云はれる。花を持ち続けて生涯を終ることができるといふわけである。そこに芸人の理想がある。

3. 花を知る事 能に稽古といふことは、したがって、「花の公案」を手がかりにして身をつくし心をこめて能の学習をすることで、それは「花を知る事」の一事に尽きるともいふことができる。それ故、世阿弥は『花伝書』第二問答条々の末尾に、この事を問答の形式を用ひて、次のやうに述べてゐる。

問。能に花を知る事、この条々を見るに、無上第一なり。肝要なり。又は不審なり。これいかんとして心得べきや。

答。此の道の奥儀を究むるなるべし。一大事とも、秘事とも、ただこの一道なり。

このやうに、「花を知る事が」いかに大切であるか、を述べた後、『花伝書』に記した条々はすべてこれ「花を知る」ための手立を訓へたものであるが、花には別して、「業<sup>わざ</sup>より出来<sup>いで</sup>る花」と、「真<sup>まこと</sup>の花」との二種があり、若さから来る「時分の花」、生れついて恵まれた声から来る「声の花」、姿形の美しさから来る「幽玄の花」などは前者で、これらの花は一時咲くことはあつても、やがて散る時分が必ず来る。したがって、一時の名声を得ても長持ちはしない。これに反して、「真の花」は、咲かせることも散らせることも、思ふ儘に出来る花をいふ。生涯その人に着いて離れぬ花で、自分のものになり切つた花をいふ。「業から来る花」と「真の花」とのこのやうな違ひを知ることが大切で、それには、如何にすべきか。世阿弥はこれに答へて云ふ。

ただ煩はしくは心得まじきなり。先づ、七歳より<sup>そのかた</sup>以来、年来稽古の条々、物ま

ねの品々を、よくよく心中に当てて分ち覚えて、能を尽し、工夫を極めて後、この花の失せぬ所をば知るべし。この物数を極むる心、即ち、花の種なるべし。されば、花を知らんと思はば、先づ、種を知るべし。花は心、種は態なるべし。古人云はく。

心地含諸種      普雨悉皆萌  
頓悟花情已      菩提果自成

(心地にもろもろの種を含む あまねき雨に悉くみな萌す 頓に花の情<sup>こころ</sup>を悟りをはりぬれば 菩提の果おのづから成ず)

七歳の稽古始めより生涯かけての学習は、「花の公案」によつて導かれる。「年来稽古の条々、物まねの品々」とあるのは、『花伝書』第一・第二の夫々の個条をいふ。その条々に盛られてゐる「花の公案」を、「よくよく心中に当てて分ち覚えて、能を尽し、工夫を極め」ることによつて、「花の失せぬ所をば知る」ことができる。この場合、「能を尽す」と、「工夫を極める」とが、稽古の二大眼目である。それ故稽古には、全体として、二つの契機がある。「花の公案」を「心中に当てて分ち覚えて」、これを稽古の課題とし、指針とし、目標としながら、他方では、二大眼目たる「能を尽し」「工夫を極める」。「能を尽す」ことによつて「花の種」を知り、「工夫を極める」ことによつて「花の心」を知る。「花は心、種は態<sup>おど</sup>」とは、態(種)を生かして、花を咲かせるものは、工夫公案によつて得た心である、といふほどの意味である。

## 花 の 公 案 の 心 理 と 論 理

能に稽古とは花を知るといふ一道であり、花の公案とはそのまた稽古の課題であり指針であり目標であり、さらに花とは珍しきと面白きと同じ心である、といふのであるから、花の公案のねらひは「珍しき」(同時にまた面白き)を打出すべき演能の手立のあれこれにほかならぬ。

以下『花伝書』に示された多くの公案のうちから、珍しさ(同時にまた

面白さ)の心理と論理とを内容とするものを数種ほど採りあげてみよう。

1. 時の花の外に、珍しき花のあるべき 「能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。住せずして、余の風体に移れば、珍しきなり。」といつて、「一所不住」といふことを、世阿弥が能における花の論拠としてゐることは、既に、「はしがき」で述べた通りである。しかし、珍しさは、一所に留まらぬところに在るといつても、それはけつして奇矯なまねをして人を驚かせよといふのではなく、時の人の好みの移り変りに合ふやうな風体をせよ、といふのである、と説いて、次のやうな公案を示してゐる。

ただし、様あり。珍しきといへばとて、世になき風体をし出だすにてはあるべからず。花伝に出だす所の条々を悉く稽古し終りて、さて、申樂をせん時に、その物数を用々に従ひて、取り出だすべし。花と申すも、万の草木において、いづれか、四季(折節)の、時の花の外に、珍しき花のあるべき。その如くに、習ひ覚えつる品々を極めぬれば、時・折節の当世を心得て、時の人の好みの品によりて、その風体を取り出だす、これ、時の花の咲くを見んが如し。花と申すも、去年咲きし種なり。能も、もと見し風体なれども、物数を極めぬれば、その数を尽す(ほど)久しし。久しくて見れば、また珍しきなり。

四季折節の時の花の外に珍しい花のあるはずはない、といふのが、この公案の眼目である。したがつて、『花伝書』に示されたところの条々をすべてまともに稽古して、さて、実際に演能をする時、習ひ覚えて身についた芸能の物数の中から、時人の嗜好に合つた風体を取り出せばよいわけで、殊更に人目を驚ろかすやうな「世になき風体」をして、人の気を引いても、まことの花とはいはれない。春には春の花、夏には夏の花が人の心をよろこばせるのと同じで、世阿弥のいふ「珍しき」は、季節の花を見て楽しむ人のこころを指してゐるのである。それ故、「花と申すも、去年咲きし種なり。能も、もと見し風体なれども、物数を極めぬれば、その数を尽すほど久しし。久しくて見れば、また珍しきなり。」といつて、「時に合ふ」と

いふところに、珍しさのころを見てゐるのである。季節はづれの花に出会つたときの心理を指してゐるのではない。それはまた、逆に云へば、スタンド・プレイを嫌ふころでもあらうか。

2. 花とて別にはなきものなり 常住の花などといふものの、ありえないことを説くところに、この公案の眼目がある。人は常在の花を想ひうかべるかもしれぬが、「花の比喩」に述べたやうに、世阿弥の花の根本規定は「一所不住」即ち「無常性」である。花は無常である。否、むしろ、「無常即花」といふ方が正しいかもしれぬ。「いづれの花か散らで残るべき。散る故によりて、咲く<sup>さく</sup>比あれば、珍しきなり。能も住する所なきを、先づ、花と知るべし。」花の生命が珍しさにあるとすれば、花は無常でなければならぬ、といふのだ。西洋に、神よ、あなたは、どうして、美しいものを、はかなく、お創りになつたのか、と人間が尋ねたところ、いや、わたしは、はかないものを、美しく創つたのぢや、と神が答へた、といふ説話がある（ゲーテの書いたものと記憶する）。東洋の思想と似てゐるやうで、どこか違ふやうでもある。世阿弥はこの公案を、次のやうに説く。

その上、人の好みも色々にして、音曲・振舞・物まね、所々に變りて、とりどりなれば、いづれの風体をも、残しては叶ふまじきなり。しかれば、物数を極め尽したらん為手は、初春の梅より秋の菊の花の咲き果つるまで、一年中の花の種を持ちたらんが如し。いづれの花なりとも、人の望み、時によりて、取り出だすべし。物数を極めずば、時によりて、花を失ふことあるべし。喩へば、春の花の<sup>くら</sup>比過ぎて、夏草の花を賞翫せんずる時分に、春の花の風体ばかりを得たらん為手が、夏草の花はなくて、過ぎし春の花をまた持ちて出でたらんは、時の花に合ふべしや。これにて知るべし。ただ、花は、見る人の心に珍しきが花なり。しかれば、花伝の花の段に「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬ所をば知るべし。」とあるは、この口伝なり。されば、花とて別にはなきものなり。物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり。「花は心、種は<sup>むね</sup>態」と（書ける）も、これなり。

稽古の模様は、この公案も、第一の公案と変りはない。それは当然で、「物数を極めて、工夫を尽して後、花の失せぬ所を知るべし」といふことは、どの公案の場合でも同じであらう。しかし、第一の公案の眼目が、異様の風体を戒める点にあるとすれば、この公案のねらひは、花の無常性を悟るところにあることを知らなければならぬ。同じく「物数を尽して、工夫を得て、珍しき感を心得るが花なり」といふことを知るにしても、「花とて別にはなきものなり」といふ理を悟得した上で、見る人の心に珍しき能を演じなければならぬのである。

3. 巖に花の咲かんが如し 鬼をいかに鬼らしく演じても、それだけでは、およそ芸としての面白味が欠ける。つまり花がない。あたかも巖ばかりを見るやうで、殺風景の感をまぬかれない。能では、巖に花の咲いたやうな芸がのぞましい。しからば、鬼を面白く演じる手立は如何、といふのが、この公案のねらひである。

物まねの鬼の段に、「鬼ばかりをよくせん者は、鬼の面白き所をも知るまじき」と申したるも、物数を尽して、鬼を珍しくし出だしたらんは、珍しき所花なるべきほどに、面白かるべし。余の風体はなくて、鬼ばかり（をする）上手と思はば、よくしたりとは見ゆるるとも、珍しき心あるまじければ、見所に花はあるべからず。「巖に花の咲かんが如し」と申したるも、鬼をば強く、恐ろしく、肝を消すやうにするならでは、およその風体なし。これ巖なり。花といふは、余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と人の思ひ慣れたる所に、思ひの外に鬼をすれば、珍しく見ゆるる所、これ、花なり。しかれば、鬼ばかりをせんずる為手は、巖ばかりにて、花はあるべからず。

『花伝書』第二物学条々に、「鬼ばかりしかできない者は、たとへ上手でも、鬼の面白い所はどこにあるか、本当にはわかつてゐまい。」と記してあるが、鬼をいかに強く、恐ろしく、肝を消すやうに上手に演つたにしても、それだけでは、たとへば、巖だけをただ眺めるやうなもので、芸能の妙味

といふものは出て来ない。「余の風体はなくて、鬼ばかりをする上手と思はば、よくしたりとは見ゆるるとも、珍しき心あるまじければ、見所に花はあるべからず。」花に欠けるといふわけである。

これに反して、物数を尽して、さまざまな風体を演じうる達者な芸人が、たまたま、鬼を珍しくやつたりすると、「珍しき所花なるべきほどに、面白かるべし。」といふことになる。例へば、「余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と人の思ひ慣れたる所に、思いの外に鬼をすれば、珍しく見ゆる所、これ花なり。」巖に花の咲かんが如しといふのは、このやうな芸をいふのである。

4. 老木に花の咲かんが如し この公案も、第三の公案と同様物まねに関するものである。この度は、鬼ではなくて、老人の物まねである。「花はありて年寄と見ゆる」といふのが、ねらひである。足腰までがきかなくなつた老体と、それに伴ふ老人特有の心理とをもとに、「年寄りの若振舞」といふところに、珍しき理を見ようとする公案である。

一、物まねに、似せぬ位あるべし。物まねを極めて、その物にまことに成り(入り)ぬれば、似せんと思ふ心なし。さるほどに、面白き所ばかりを嗜めば、などか花なかるべき。例へば、老人の物まねならば、得たらん上手の心には、ただ、素人の老人が、風流・延年などに身を飾りて、舞ひかなでんが如し。もとより、己が身が年寄ならば、年寄に似せんと思ふ心あるべからず。ただ、その時の物まねの人体ばかりをこそ嗜むべけれ。

また、老人の、花はありて年寄と見ゆるる口伝と云ふは、まづ、善悪、老じたる(風情)をば、心にかけてまじきなり。そもそも、舞・働きと申すは、万に、楽の拍子に合はせて、足を踏み、手を指し引き、振り・風情を拍子に当ててするものなり。年寄りぬれば、その拍子の当て所、太鼓・(歌)・鼓の頭よりは、ちちと遅く足を踏み、手をも指し引き、およその振り・風情をも、拍子に少し遅るるやうにあるものなり。この故実、何よりも、年寄の形木なり。このあてがひばかりを心中に持ちて、その外をば、ただ、世の常に、いかにもいかにも花やかにすべし。まづ、<sup>がんりよう</sup>仮令(も)、年寄の心には、何事をも若くしたがるものなり。さりながら、力なく、五体も重く、耳も遅ければ、心(は)ゆけども、振舞の叶はぬなり。この

理を知る事、まことの物まねなり。態をば、年寄の望みの如く、若き風情をすべし。これ、年寄の、若き事を羨(める)心・風情を学ぶにてはなしや。年寄は、いかに若振舞をすれども、この拍子に遅るる事は、力なく、叶はぬ理なり。年寄の若振舞、珍しき理なり。老木に花の咲かんが如し。

老人の物まねには、まづ、「閑心遠目」(前号参照)といふ老体の稽古が来る。この稽古を極めて、老人の人体に成り入ることができるやうになれば、もはや、特別に年寄に似せようと思ふ心はなくてもよいわけで、普通の老人が衣装をつけて、舞つてゐるのと同じと心得ていい。

次いで、「老人の、花はありて年寄と見ゆる」やうに演るにはどうするか、といふ課題がくる。老木に花を咲かせる手立如何といふ問題である。

まづ、前述のやうに、型において、自分は既に年寄なのであるから、(稽古で老体に成り入つてゐるから、)年寄りに殊更似せようと心がける必要はない。老体に成り切つたままで、舞・働きその他なんでも演るがよい。しかし、手足などの動作は、拍子に乗せる時、少し遅れるやうに心掛ける。「この故実、何よりも、年寄の形木なり。」この点さへ、忘れなければ、あとは、普通に、「いかにもいかにも花やかにすべし。」大体、老人の心理といふものは、年寄の冷水で、何事も若くしたがるものである。この点を心得て、「態をば、年寄の望みの如く、若き風情をすべし。」

「これ年寄の若き事を羨める心・風情を学ぶにてはなしや。年寄は、いかに若振舞をすれども、拍手に遅るる事は、力なく、叶はぬ理なり。」このやうに年寄の若振舞といふのは、まさに珍しき感をひきおこす道理である。この公案を稽古で学びとれといふのである。

5. 常よりもなほ面白き これは音曲・舞・働き・振り・風情などに関する公案である。これらの面で珍しき感を見聞く人に与へる手立、これがこの公案のねらひである。例へば、音曲では、「節は定まれる形木」であるが、曲となると「上手のもの」でなければ演れない。舞でいへば、手は

「習へる形木」であるが、品となると「上手のもの」でなければ出せない。音曲でも、舞でも、これらの「形木」の段階では、まだ、面白味といふものは出て来ない。珍しき感<sup>かん</sup>は「形木」を超えたところに生れるものであるらしい。

一、細かなる口伝に云はく、音曲・舞・働き・振り・風情、これまた、同じ心なり。これはいつもの風情・音曲なれば、さやうにぞあらんずらんと人の思ひ慣れたる所を、さのみに住せずして、心根に、同じ振りながら、元よりは軽々と風体を嗜み、いつもの音曲なれども、なほ、故実を廻らして、曲を彩り、声色を嗜みて、我が心にも、今ほどに執する事なしと、大事にして、この態をすれば、見聞く人、常よりもなほ面白き(など)、批判に合ふことあり。これは見聞く人のため、珍しき心にあらずや。

しかれば、同じ音曲・風情をするとも、上手のしたらんは、別に面白かるべし。下手は、もとより、習ひ覚えつる<sup>ふしはかせ</sup>節博士の分なれば、珍しき思ひなし。上手と申すは、同じ節かかりなれども、曲を心得たり。曲と云ふは、節の上の花なり、同じ上手、同じ花の中にも、無上の公案<sup>かたぎ</sup>を極めたらんは、なほかつ、花を知るべし。およそ、音曲にも、節は定まれる形木、曲は上手のものなり。舞にも、手は習へる形木、品かかりは上手のものなり。

音曲でも舞でも働きでも振りでも風情でも、所謂「型」を学ぶ段階ではまだ面白さが生れないのは当然である。しかし、「型」は大事で、これをしつかり身につけなければならない。「型」を出すにしても、まづ、しつかり「型」に入らなければ、正しい意味で「型」を超えることにならない。珍しさ・面白さを生み出すのは、その上での話である。

さて、その「型」を一応身につけた上で、見聞く人たちが、いつもの調子だと思つてゐる所を、「さのみに住せずして、心根に、同じ振りながら、元よりは軽々と風体を嗜み、いつもの音曲なれども、なほ、故実を廻らして、曲を彩り、声色を嗜みて、」自分でも、今までにないほど、熱を入れて、大事にして、演ずれば、見る人聞く人から、いつもより今日は大変面白い、といふ賞讃の言葉の出ることがある。これこそ、「見聞く人のため、珍し

き心にあらずや。」といふわけである。

このやうなわけで、上手が演ると、何をやつても面白い。しかし、同じ上手のうちでも、殊に、無上の公案を極めた芸人が演ると、その上にも特別の面白さが生れてくる。珍しさ、面白さの生れる源は、以上のやうなところにあることを知るべきである。

**6. 秘する花を知る事** 秘事といふことは、わが国中世に盛んであつたといはれてゐるが、しかし一步退いて見ると、これは何も、わが国だけに限つたことではなく、また、中世にのみ特に行はれたことでもない。古今東西に見られる普通の現象である。闘争勝負の盛行するところでは、とくにどこでも存したことで、珍しいことではない。

また、秘事といふことが、わが国の学芸などに停滞をもたせた大きな原因であるかの如くいふ向きもあるが、秘事が形式に墮したところに、そのやうな現象の見られ、さらに、秘事の活用を誤つたところに学芸などの衰退のあつたことはいなめないけれども、その反面、秘事の真義を正しく理解し活用したところでは、むしろ、それが現実の生活に一種の活力を与へてゐたことを見のがすことができない。

世阿弥が秘事について、どのやうな理論を考へてゐるかは、興味のあることで、「秘すれば花なり。秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。」といふあたり、秘事の骨髓を道破してゐる観がある。

一、秘する花を知る事。秘すれば花なり、秘せずば花なるべからず、となり。この分け目を知る事、肝要の花なり。そもそも、一切の事、諸道芸において、その家々に秘事と申すは、秘するによりて大用あるが故なり。しかれば、秘事といふことを顕はせば、させる事にてもなきものなり。これをさせる事(にて)もなしと云ふ人は、未だ、秘事と云ふ事の大用を知らぬが故なり。先づ、この花の口伝におきても、ただ、珍しきが花ぞと皆人知るならば、さては珍しき事あるべしと

思ひ設け(たらん)見物衆の前にては、たとひ珍しき事をすると、見手の心に、珍しき感はあるべからず。見る人のため、花ぞとも知らでこそ、為手の花にはなるべけれ。されば、見る人は、(ただ)思ひの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。さるほどに、人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立、これ、花なり。

例へば、弓矢の道の手立にも、名将の案・計らひにて、思ひの外なる手立にて、強敵にも勝つ事あり。これ、負くる方のためには、珍しき理に化かされて、敗らるるにてはあらずや。これ、一切の(事)、諸道芸において、勝負に勝つ理なり。かやうの手立も、事落居して、かかる計り事よと知りぬれば、その後は(たやす)けれども、未だ知らざりつる故に負くるなり。さるほどに、秘事とて、一つをば我が家に遺すなり。ここをもて知るべし。たとひ頭は(さ)ずとも、かかる秘事を知れる人ぞとも、人には知られまじきなり。人に心を知られぬれば、敵人油断せずして用心を持てば、かへつて、敵に心<sup>かたき</sup>を附くる相なり。敵方用心をせぬ時は、此方の勝つ事、なほ(たやす)かるべし。人に油断させて勝つ事を得るは、珍しき理の大用なるにてはあらずや。さるほどに、我が(家)の秘事とて、人に知らせぬをもて、生涯の主になる花とす。秘すれば花、秘せねば花なるべからず。

世阿弥はいふ。諸道芸において、それぞれの家々に秘事というものがあるが、その秘事は秘して他に知らせぬところに大きな効用を発揮するものであつて、秘事と称するものも露頭してしまへば、内容は大したものではないのである。しかし、それだからといつて、一概に秘事はくだらぬもの、無用なものといふ人があれば、その人は、まだ、秘事といふものの効用性の大きいことを正しく理解しないからである。能の世界では、珍しきが花であるといふことが口伝であると知つて、さては何か珍しき事があるに違ひない、と待ち設けてゐる見物衆の前では、たとひ珍しき事を演じて、見手の心に珍しい感を興させることはできない。これは、芸人にとつては生命にも代へ難い一大事である。見物衆は花とも知らないでこそ、役者の花にはなるのである。「されば、見る人は、ただ思ひの外に面白き上手とばかり見て、これは花ぞとも知らぬが、為手の花なり。」それ故、「人の心に思ひも寄らぬ感を催す手立、」これが秘せる花の公案である。以上が、世阿弥の秘事に関する理論の大略である。

世阿弥はさらに、上の理論を、弓矢の道に例をとって説明してゐるが、役者と見物とは、ある意味では、敵同志と見られる。相手方の思ひもよらぬ手立を用ゐて、強敵に勝つことがある。相手方は、「珍しき理に化かされて」敗れたのである。「これ一切の事、諸道芸において、勝負に勝つ理なり。」しかし、このやうな手立も、勝負がついて、計り事が判明して見れば、大した事でなくても、敵は知らなかつたばかりに、負けたのである。それ故、芸道の家にも、秘事といふものを一つ遺す必要がある。その間の心理を分析すれば、「かかる秘事を知れる人ぞとも、人には知られまじきなり」。人に心を知られぬれば、敵人油断せずして用心を持てば、かへつて、敵に気付かれてしまふ。敵方が用心をせぬ時は、此方が容易に勝つことができるわけで、人に油断をさせて勝つ事を得るは、「珍しき理の大用なるにてはあらずや。」秘事の効用ここにあり、といふわけである。生涯を通じて芸能の主となるための花を持ちつづけるには、秘事は欠くことはできないものである。「秘すれば花、秘せねば花なるべからず」の公案の真義は、ここにあり、といふべきか。

7. 能に十体を心得べき事 ここに「十体」とは、物まねのあらゆる風体を指す。「十」は文字通り十の意味にも使はれるとともに、数多くの意味でもあり、すべてのというほどの意味にもとれる。「十体を心得る」は、したがつて、「花の種」「能数」を多く持つといふことである。持駒が多ければ、必要に応じて、心の工夫（「花の心」）次第で、いつでも、どこでも、だれにでも、ふさわしい芸能を演じて見せることができる。この公案は、能の命の長久を願ひ、つねに人々の賞讃を失はぬためには、無視することのできないものである。

一、能に<sup>じつたい</sup>十体を心得べき事。十体を得たらん為手は、同じ事を、一廻り一廻りづつすると、その一通りの間久しかるべければ、珍しかるべし。十体を得たら

ん人は、その内の故実・工夫にては、百色にも亘るべし。先づ、五年三年の中に一遍づつも、珍しくし替ふるやうならんずるあてがひを持つべし。これは、大きな<sup>あんりう</sup>安立なり。または、一年の中、四季折節をも心に掛くべし。また、日を重ねたる申樂、一日の中は申すに及ばず、風体の品々を彩るべし。かやうに大がうより初めて、ちちとある事までも自然々々に心に掛くれば、一期、花は失せまじきなり。

「珍しき理」といふ点から見ると、十体を心得てゐる芸人は、同じ事を繰り返すにしても、その一廻りは、長期にわたるわけで、人気も永続きする。しかも、その上に、故実を知り、工夫を極めてゐれば、十体を倍して、百色にも活用できる。五年・三年の中に一度づつの割で、為替へるやうに割当てることできる。これは確かに安定性をもつた芸人といへよう。あるひは、一年の中でも、四季に応じた芸もできるし、更に短かく、数日演能の続く場合にも、また、日の中ならなほさら、色々と変つた風体を為替へて彩りをもたせることができる。演能の場所についても、大庭の晴れの舞台でも、田舎のささやかな舞台でも、それにふさわしい能を、自づと無理なく演じうるわけで、生涯を通じて、花を失ふことなしにすごすことができる。

8. 年々去来の花を忘るべからず 十体を横に並べ、年々去来の花を縦に列ねて見ることができる。十体は前述のやうに、物まねの品々である。『花伝書』第二物学条々には、女・老人・直面・物狂・法師・修羅・神・鬼・唐事を挙げてゐるが、後に二曲三体の思想が形作られると、老・女・軍三体を基本の風体とみて、これを基にたくさんの応用風を生み出すことができるといふ考へ方に進んでゐる。これらの物まねの風体をいまかりに横に並べることができるとすれば、年々去来の風体とは、初心・壮年・老年と芸人の一生を貫いて、それぞれの時期に身に即く風体をいふのであるから、一応縦に列ねて見ることができる。年々去来の花を忘るべからずという公案

は、「時分々々の、おのれと身にありし風体を、皆、当芸に一度に持つ事」をねらひとするものであるから、縦に列ねた風体を、現在の自分の芸の中に、集めて持てといふ公案である。このやうに見てくると、十体を心得べしといふ公案も、横に並べうる多くの風体を一身に集めて持つことをねらひとするものであることがわかつてくる。いづれも、欲の深い公案である。芸人は、芸の為めには欲深でなければならぬ。だから、一人の芸人が、「ある時は児<sup>こ</sup>若族の能かと見え、ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほども臆<sup>おそ</sup>たけて、劫入りたるやうに見えて、同じ主とも見えぬやうに能をする」ことが理想とされる。「これ即ち、幼少の時より老後までの芸を一度に持つ理なり。」そこで、これを年々去り来る花の公案といふのである。

また云はく、十体を知らんよりは、年々去来の花を忘るべからず。年々去来の花とは、例へば、十体とは物まねの品々なり。年々去来とは、幼なかりし時の粧ひ、初心の時分の態、手盛りの振舞、年寄りての風体、この時分々々の、おのれと身にありし風体を、皆、当芸に一度に持つ事なり。ある時は児<sup>こ</sup>・若族<sup>にやくぞく</sup>の能(か)と見え、ある時は年盛りの為手かと覚え、または、いかほど臆<sup>おそ</sup>たけて、劫入りたるやうに見えて、同じ主とも見えぬやうに能をすべし。これ、即ち、幼少の時より老後まで芸を一度に持つ理なり、さるほどに、(年々<sup>としとし</sup>)去り来る花とは云へり。

ただし、この位に至れる為手、上代・末代にも、見も聞きも及ばず亡父の若盛りの能こそ、臆<sup>おそ</sup>たけたる(風体)、殊に得たり(ける)など聞き及びしか四十(有余)の時分よりは、見慣れし事なれば、疑ひなし。自然居士の物まねに、高座の上にての振舞を、時の人、十六七(の人体)に見えしなど、沙汰ありしなり、これは<sup>まさ</sup>正しく人も申し、身にも見たりし事なれば、この位に相応したりし達者かと覚え(しなり)。かやうに、若き時分には、行末の年々去来の風体を得、年寄りては、(過ぎし)かたの風体を身に残す為手、二人とも見も聞きも及ばざりしなり。

されば、初心よりの以来<sup>このかた</sup>の、芸能の品々を忘れずして、その時々、用々に従ひて取り出だすべし。若くては年寄の風体、年寄りては盛りの風体を残す事、珍しきにあらずや。しかれば、芸能の位上れば、過ぎし風体をし捨て忘るる事、ひたすら、花の種を失ふなるべし。その時々<sup>としとしときとき</sup>にありし花のままにて、種なければ、手折れる(枝の花)の如し。種あらば、年々時々<sup>ころ</sup>の比に、などか逢はざらん。ただ、返す返す、初心を忘るべからず。されば、常の批判にも、若き為手をば、「早く

上りたる」,「劫入りたる」など誉め、年寄りたるをば、「若やぎたる」など、批判するなり。これ、珍しき理ならずや。十体の内を彩らば、百色になるべし。その上に、年々去来の品々を、一身当芸に持ちたらんは、いかほどの花ぞや。

世阿弥はいふ。年々去来の花を一身に一度に持った理想の芸人は、昔も今も、見聞したことがない。しかし、ただ、一人、亡父観阿弥は例外で、若盛の能に劫入りたる風が見え、壮年の能に十七・八の人体が見られた。「かやうに、若き時分には、行末の年々去来の風体を得、年寄りては、過ぎしかたの風体を身に残す」やうな優れた芸人は、亡父以外には二人となかつたと思ふと。

この公案のねらいも、要するに、「珍しき」にあるので、「若くて年寄の風体、年寄りては盛りの風体を残す事」は、まさに、珍しきといふべきである。しかし、世の芸人を見ると、位が上ると、前の風体を忘れ去るのが普通で、これでは、せつかくの花の種を失ふことになる。現に持つ花だけで、前後の花種を持たない為手の芸は、「手折れる枝の花」の如きである。種さへあれば、時に会ふは必定である。十体を工夫によつて百色にし、その上に、年々去来の品々を、一身当芸に加へたならば、どれほどの花を持つことになるか。まことに、すばらしいといはざるを得ない。

9. 舞・働き・物まね、あらゆる事に住せぬ理 あらゆる事に住せぬ用心、といふものを、世阿弥の挙げてゐる事例に従つて並べて見る。(1) 怒れる風体をする時は、柔らかな心を忘れてはならぬ。これは、いかに怒る芸を演つても、それが荒々しい芸にならないための手立である。怒れる芸に柔らかな心を持つ、といふところに、珍しさの生れる理がある。さうして、そこに芸の面白さが生れる、といふのである。(2) 幽玄の物まねには、心を強くもつといふ道理がある。さうでないと、能が弱くなる嫌ひがあるからである。これも、一つ所に片寄ることを避け、停ることを厭ふから

である。これも、あらゆる事に住せぬ理である。(3) 身を使ふ場合にも、同じ用心が必要である。身を強く動かす時は、足踏みをゆるやかに窃むやうにする。足を強く踏む時は、身を静かにたもつ。この用心は前号(第44号)に採りあげた、強身動宥足踏・強足踏宥身動の公案と同じものである。

このやうに見てくると、この公案はあらゆる事に住せぬところに、珍しさの生れる源を見てゐるらしいが、それは、一応認めるとしても、「一所不住」とは違ふらしい。むしろ、上記の実例によつてもわかるやうに、一種の矛盾の統一、——それは矛盾する二のものの和でもなく、加へて二で割つた商でもなく、単に混在乃至並在してゐるのでもなくて、芸の「珍しさ」を生み出す美事な調和乃至諧調とでも名付くべき底のものであるらしい。

一、能に、万づ用心を持つべき事。仮令、怒れる風体をせん時は、柔らかなる心を忘るべからず。これ、いかに怒るとも、荒かるまじき手立なり。怒れるに柔らかなる心を持つ事、珍しき理なり。また、幽玄の物まねに、強き理を忘るべからず。これ、一切、舞・働き・物まね、あらゆる事に住せぬ理なり。また、身を使ふ中にも、心根あるべし。身を強く動かす時は、足踏みを窃むべし。足を強く踏む時は、身をば静かに持つべし。これ、筆に見え難し。相對しての口伝なり。

10. 因果の花を知る事 一切、みな因果なり、と世阿弥はいふ。例へば、初心よりの芸能の数々は因で、名声を得る事は果である。稽古の因がおろそかだと、名声の果をうることはできまい。時運にも因果がある。去年善ければ、今年が悪い。善いあとは悪い、と世阿弥はいふ。それが因果の理だといふのである。時間にも因果がある。男時・女時がそれである。運の付きの有無をいふらしい。能にも、出来のよい時と、どうしても出来のわるい時がある。これは「力なき因果」であるといふ。人力では如何ともすることのできない因果の理法といふ意味である。

このやうに見てくると、努力次第で左右しうる因果と、人の力では動かし難い因果との二種あるやうにもうけとれる。稽古の強弱による名声の得

不得の分れ目は、前者の場合であり、男時・女時の廻り合せによる出来不出来は、後者の例である。世阿弥が、因果の花を知る事の公案で、主として問題にしてゐるのは、後者の場合であるらしい。世阿弥の説く要領は、力なき因果の理には、強ひて逆らはず、むしろ、この理の上に乗つて、この理のもつ「珍しき大用」、すなはち、大きな効用性を利用すべきだ、といふにあるらしい。以下、それを見てみよう。

一、因果の花を知る事、極めなるべし。一切、みな因果なり。初心よりの芸能の数々は、因なり。能を極め、名を得る事は、果なり。しかれば、稽古するところの因おろそかなれば、果を果<sup>はた</sup>すことも(難し)。これをよくよく知るべし。また、時分にも恐るべし。去年<sup>こぞ</sup>盛りあらば、今年は花なかるべき事を知るべし。時の間にも、男時<sup>おどき</sup>・女時<sup>めどき</sup>とてあるべし。いかにすれども、能にも、よき時あれば、必ず、また、わろき事あり。これ、力なき因果なり。これを心得て、さのみ(に)大事になからん時の申樂には、立合勝負に、それほどに我意執を起さず、骨をも折らで、勝負に負くるとも心に懸けず、手を貯<sup>たば</sup>いて、少な少々と能をすれば、見物衆も、これはいかやうなるぞと思ひ醒めたる所に、大事の申樂の日、手立を変へて、得手の能をして、精勵を出だせば、これまた、見る人の思ひの外なる心出で来れば、肝要の立合、大事の勝負に、定めて勝つ事あり。これ、珍しき大用なり。このほどわかるかりつる因果に、またよきなり。

およそ、三日に三庭<sup>みにわ</sup>の申樂あらん時は、指寄<sup>さしより</sup>の一日などは、手を貯<sup>たば</sup>いて、あひしらひて、三日の中に、殊に折角の日と(おぼしからん)時、よき能の得手に向きたらんを、眼<sup>がんぜい</sup>睛を出だしてすべし。一日の中にも、立合などに、自然、女時に取り逢ひたらば、初めをば手を貯<sup>たば</sup>いて、敵の男時、女時に下る時分、よき能を揉み寄せてすべし。その時分、また、此方の男時に復る時分なり。ここに能よく出で来ぬれば、その日の第一をすべし。この男時・女時とは、一切の勝負に、定めて、一方色めきて、よき時分になる事あり。これを男時と心得べし。勝負の物数久しければ、両方へ移り変り移り変りすべし。ある物に云はく、「勝負神とて、勝つ神・負くる神、勝負の座敷を定めて、守らせ給ふべし。弓矢の道に、宗と秘<sup>むね</sup>する事なり。」敵方の申樂よく出で来たらば、(勝神)彼方にましますと心得て、先づ、恐れをなすべし。これ、時の間の因果の二神にてましますれば、両方へ移り変り移り変りて、また、我が方の時分になると思はん時、頼みたる能をすべし。これ、即ち、座敷の中の因果なり。返す返す、おろそかに思ふべからず。信あらば徳あるべし。

因果の花を知る要領は、力なき因果の理を、すなほに、まづ受け入れて、例へば、それほど大事でない時の能には、立合勝負にも、あまり我意を張らず、極く自然に、勝負などは気にせず、力を出し切らないやうに心懸け、ひかへ目な能をする。さうすると、見物は、どうしたことかと、やや興さめた気分である所に、大事な申楽の日が来た時、手立を変へ、最も得意とする能を、精出して演じると、これはまた、見物は急の変化に意外のことと驚いて、大事な立合勝負に、勝利をうることに必定である。これこそ、まさに、「珍しき大用」であり、前が悪かつた因果で、後が好転したのであるといふ。力なき因果の花を知るといふのは、因果の理を心得てこれに逆らはず、これに随順することによつて、芸能の効果を挙げることにほかならない。因果の花を知るとは、運のむいて来るまで、手をこまねいて居れ、といふ公案ではなく、むしろ、張りたがる我意を静め、動きたがる身を押へ、冷静な眼で好転の機会を待つ、現実直視の強い姿である、と見るべきか。

世阿弥は、更に、男時・女時を例にとつて、立合勝負の要領を説いてゐるが、勝つ神と負くる神との二柱の神が、交互に、敵と味方とに移り変わるものであるから、もし、「敵方の申楽よく出で来たらば、勝神彼方にましますと心得て、先づ、恐れをなすべし。」といふ。実際には、さうと知つても、なかなか出来ないことである。心から恐れをなす人は、よほど強くて自信があつて冷静な人であるにちがひない。さうして、やがて「また、我が方の時分になると思はん時、頼みたる能をすべし。」所謂、満を持してゐて、思ひ切つて得意な能を演じて勝負を一気に決すべし、といふのである。世阿弥は、この公案には、よほどの自信があるとみえて、「返す返す、おろそかに思ふかべらず。信あらは徳あるべし。」といふ言葉で結んでゐる。

**11. 因果と珍しき理** 前の公案で、よい時とわるい時の交替する因果の理をみて来たが、第十一の公案はそれを受けて、因果の道理をよくよく思

案してみると、要するに、よしあしといつても、ただ、珍しきと珍しからぬの二つにほかならない、といふことを教へてゐるのである。例へば、同じ上手が、同じ能を、昨日も演り、今日も演つて、昨日は大層面白かつたのに、今日はさほどに面白くないのは、昨日は珍しいために面白く感じ、今日はもはや珍しくないで、面白いと思はないのである。したがつて、能の出来のよし・あしは、結局珍しきと珍しからぬによつて定まるわけで、能自体のよし・あしではないのだ、といはねばなるまい。

世阿弥はいふ。「されば、この道を極め終りて見れば、花とて別にはなきものなり。奥儀を極めて、万づに珍しき理を我と知るならでは、花はあるべからず」と。さう云つて、世河弥は、維摩経入不二法門経にある「善悪不二、邪正一如」といふ文句を示してゐる。ここまで来ると、よし・あしといふものも、何によつて定まるかといふに、時により、用足るものがよく、用足らぬものがあし、といふことになる。したがつて、「時に用ゆるをもて、花と知るべし、」といふのが、この公案の結論である。

一、そもそも、因果とて、よき・あしき(時)のあるも、公案を尽して見るに、ただ、珍しきと(珍しからぬ)の二つなり。同じ上手にて、同じ能を、昨日・今日見れども、面白やと見えつる事の、今日また面白くもなき(時)のあるは、昨日面白かりつる心慣ひ、今日は珍しからぬによりて、わろしと見るなり。その後、また、よき(時)のあるは、先にわるかりつるものと思ふ心、また、珍しきに復りて面白くなるなり。されば、この道を極め終りて見れば、花とて別にはなきものなり。奥儀を極めて、万づに珍しき理を我と知るならでは、花はあるべからず。経に云はく、「善悪不二、邪正一如」とあり。本来より、よき・あしきとは、何をもて定むべきや、ただ、時によりて、用足る物をばよき物とし、用足らぬをあしき物とす。この風体の品々も、当世の数人<sup>しゆにん</sup>、所々に亘りて、その時の遍ねき好みによりて取り出だす風体、これ、用足るための花なるべし。此所に、この風体を<sup>もてあそ</sup>翫(め)ば、彼所に、また、余の風体を賞翫す。これ、人々心々<sup>にんにんこころごころ</sup>の花なり。いづれを誠にせんや。ただ、時に用ゆるをもて、花と知るべし。

む す び

1. 稽古の倫理 本論で花の心理と論理とを採りあげたから、むすびでは、稽古の倫理ともいふべきものを見てみよう。『花伝書』の序とも見るべき文章の末尾のところに、

- 一、好色・博奕(ばくち)・大酒<sup>三重戒、是古人ノ掟也</sup>
- 一、稽古は強かれ、諍識<sup>じやうしき</sup>はなかれとなり。

とある。色におぼれ、ばくちにふけり、酒びたりになることを、三重戒とし、古人のさだめた掟としてゐるのは、道に精進するものの守るべき当然のいましめであらう。これに続いて、強い稽古が要求され、同時に、諍識(情識のあて字)を戒めてゐる。諍識といふのは、得手勝手なところを云ひ、慢心とか、うぬぼれとかいふほどの意味である。謙虚なところに裏打ちされた真剣な向上心とはうらはらなところである。

2. 稽古は強かれ諍識はなかれ 諍識は芸に精進するものにとつて、老若に関らず、上手下手を問はず、能の向上に大きなさまたげになる。世阿弥は、諍識の戒めをいくつかの例をあげて説いてゐる。先づ、「問答条々」に云ふ。

問. 能に得手々々とて、殊の外に劣りたる為手も、一向き、上手に勝りたる所あり。これを上手のせぬは、叶はぬやらん。また、すまじき事にてせぬやらん。

答. 一切の事に、得手々々とて、生得、得たる所あるものなり。位は勝りたれども、これは叶はぬ事あり。さりながら、これも、ただ、よきほどの上手の事にて(の)了間なり。誠に、能と工夫との極まりたらん上手は、などか、いつれの向きをもせざらん。されば、能と工夫とを極めたる為手、万人が中に一人も無き故なり。無きとは、工夫は無くて、慢心ある故なり。そもそも、上手にもわるき

所あり。下手にも、よき所必ずあるものなり。これを見る人も無し。主も知らず。上手は名を頼み、達者に隠れて、わろき所を知らず。下手は、もとより工夫なければ、わろき所をも知らねば、よき所のたまたまあるをも弁へず。されば、上手も、下手も、互に人に尋ねべし。さりながら、能と工夫を極めたらんは、これを知るべし。いかなるをかしき為手なりとも、よき所ありと見ば、上手もこれを学ぶべし。これ第一の手立なり。もし、よき所を見たりとも、我より下手をば似すまじきと思ふ諍識あらば、その心に繫縛<sup>けいばく</sup>せられて、我わろき所をも、いかさま知るまじきなり。これ、即ち、極めぬ心なるべし。また下手も、上手のわろき所を見えば、上手だにもわろき所あり、いはんや、初心の我なれば、さこそわろき所多かるらめと思ひて、これを恐れて、人にも尋ね、工夫を致さば、いよいよ稽古になりて、能は早く上るべし。もし、さはなくて、我はあれ体にわろき所をすまじきものと慢心あらば、我がよき所をも真実知らぬ為手なるべし。よき所を知らねば、わろき所をもよしと思ふなり。さるほどに、年は行けども、能は上らぬなり。これ、即ち、下手の心なり。されば、上手だにも上慢あらば、能は下るべし。いはんや、叶はぬ上慢をや。よくよく公案して思へ。上手は下手の手本、下手は上手の手本なりと工夫すべし。下手のよき所を取りて、上手の物数に入る事、無上至極<sup>ことわり</sup>の理なり。人のわろき所を見るだにも、我が手本なり。いはんや、よき所をや。「稽古は強かれ、諍識はなかれ」とは、これなるべし。

上手にとつても、下手にとつても、能の向上向下は、ひとへに諍識上慢の有無に關はる。「上手だにも上慢あらば、能は下るべし。いはんや、叶はぬ上慢をや。」下手に上慢があつては、救ひやうがない。「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」といふ公案は、諍識の戒めの上に成就するもので、これを欠いては成立しない。下手のよき所を取つて、上手の芸が更に一つ向上する事を、「無上至極の理」と呼んでゐる。何故かといふに、人のわろき所を見ることさへ、我が手本といへるなら、よき所を見る事は、無上至極といへるわけである。世阿弥は稽古の土台にこのやうな謙虚の倫理を考へてゐたのである。

追記 引用は野上豊一郎氏・西尾実氏校訂『風姿花伝』による。